

米山梅吉記念館 館報

2012
(平成24年)

春

Vol. 19



地いきの人がよろこぶために、自分のお金ややさしさで人を自分よりやさしく。それがうめ吉さんのいいところだと思します。自分たちの町をたすけてくれた人のことを調べるのは、とても楽しいと思いました。これからも長泉町や、しづおか県のことを持たくさん知りたいと思いました。

うめ吉さんが船でアメリカに行つたことを聞いて、外国で学ぶなんてすごいなと思いました。わたしは、いつも楽しい人生をおくつときましたが、たいへん人生をおくつてきた人もいるんだと思いました。

地いきの人がよろこぶために、自分のお金ややさしさで人を自分よりやさしく。それがうめ吉さんのいいところだと思します。自分たちの町をたすけてくれた人のことを調べるのは、とても楽しいと思いました。これからも長泉町や、しづおか県のことを持たくさん知りたいと思します。もし、まだうめ吉さんがいたら、あつてなかよくできるかな。

きねん館で見たことをもとに、うめ吉さんのポスターを作っています。ポスターが出来上がったら、また記念かんに行きたいです。

では、またお会いできるのを楽しみにしています。

米山うめ吉さん、お元気ですか。
今、わたしたちはてがみの書き方をべんきようしています。



公益財団法人 米山梅吉記念館



館報第19号発行に際して

理事長 渡邊脩助

全国のロータリアンの皆様、今年は辰年です。「辰」(龍)の由来通り、この一年が勢いのある壮大な年となり、少しでも希望のある年であってほしいと心より念じております。

あの3月11日から一年が経ちました。地震と巨大な津波、また東京電力福島原子力発電所の人災で、尊い命が失われた方々に哀悼の意を捧げるとともに、現在もなお被災後の日々を過ごしておられる方には、心よりお見舞いを申し上げます。

皆さんは「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事があつたことをご存知ですか。釜石市の小中学校にいた約3,000名の児童・生徒に、津波の被害者が一名もいなかつたのです。ご存知の通り、釜石は世界最大最強の防波堤を構築し、有事に備えてきましたが、津波はそれをも破壊し押し寄せました。しかし同市の学校は平時に徹底した避難訓練を励行し、習熟するまで繰り返し実行していたため、足早に全員が避難できたのです。防波堤の如き物系の備えと避難訓練等の人系の備え、その双方が大切で、たとえ物系が機能しなくとも人系がその損害を減ずることが出来ることを学んだ思いがいたします。平時に有事を語り、それに備えることがいかに大切で、同時に大変な意識付けが要ることを深く感じました。

「いつ起こってもおかしくない」と言われ続けている東海地震や東京直下型地震等での防災対策は充分でしょうか。また想定震源域の真上にある浜岡原子力発電所の事故に対する対策が大いに危惧されるところであります。国・県・地域の連携を密にし、「釜石の奇跡」を教訓に「備えあれば、憂いなし」で十分な防災体制を完備せねばなりません。

全国のロータリークラブ・ロータリアンの皆様には年度終末、そして新年度に向ってのご準備をご多忙のことと存じます。日頃の当記念館に対してのご協力に感謝を申し上げます。

次年度は、日本から田中作次氏が30年ぶりに日本人として3人目のR I会長になられます。我々日本のロータリアンにとって特別な年度となります。

す。R I会長・田中作次エレクトの2012-2013年度のテーマは、「奉仕を通じて平和をPeace Through Service」です。田中氏は、「平和とは幸福感や心の平穏、静けさであり、戦争や暴力や恐れることのない状態です。平和をどのように定義するにせよ、平和がロータリーにとって究極の、そして実現可能な目的であることを理解下さい。平和は協定や政府や大胆な闘争だけで達成するものなく、日常の簡単な方法の積み重ねによって成し遂げるものである」と述べています。そして当地区の高野ガバナーエレクトも第2620地区にとって待望久しい、国際ロータリーでも大いに活躍が期待できる若きホープであります。

さて、当記念館も昨年7月1日付けをもって、「公益財団法人米山梅吉記念館」として発足しました。記念館は第2620地区米山記念奨学生学友会の事務所でもあり、第2620地区米山奨学委員会の全ての会議に利用されております。旧館を改修した米山文庫・こども図書館は、近隣の幼児・児童が親と一緒に来館し楽しんでおります。また地域の人々の集いの場ともなり、コミュニケーションの場ともなっております。

春の例祭は4月28日(土)に行います。記念講演はNHKの「日曜討論」の司会を務めておられます、甲府市出身の島田敏男氏にお願いしました。政治、外交、安全保障についての講話が拝聴出来るものと思います。是非ロータリアンばかりでなく、一般の方々の御来館もお待ちいたしております。

おかげでさまで順調とは申せ、館運営はすべて全国のロータリアンの善意のご寄付によっています。基本的な資金の外に賛助会費、全国のロータリアンの100円募金運動、周年行事ご寄付等にたよらざるを得ない現況です。最近、記念館周辺の静岡第2分区の数クラブの全会員に賛助会員になっていただきました。心より感謝申し上げます。

厳しい冬が終わり館の春は近いです。何卒、館への移動例会を含む企画をおたてになり、御来館をお待ちしております。

秋季例祭



米山 宏氏

■日時 2011年9月17日(土)
■会場 (財)米山梅吉記念館ホール

- 例祭及び墓参
- 例祭式典
- 記念講演
演題 「振り返れば奉仕の道」
講師 植田新太郎 氏
(東京RC)
- アトラクション
キューバミュージック
パーカッショントリオ
- 懇親会

東京RC会長
弦間 明氏



記念講演



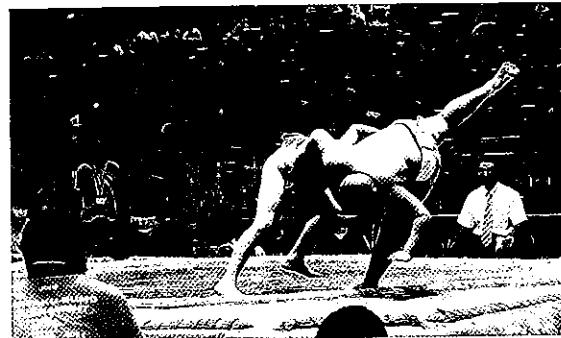
東京RCの植田新太郎でございます。私のRC歴を、自己紹介を兼ねて紹介させていただきます。私が東京RCに入会を許されたのが1974年5月で37歳。ちょうど今年で、私の人生の半分をロータリアンとして過ごしていることになります。当時の東京RCの平均年齢が70歳、とびきり若いロータリアンでした。それから37年、毎年若いメンバーが入ってきます。今でも320人くらい会員がいますが、毎年ひとつずつ年をとるため、平均年齢が若くならないのが実情です。

振り返れば奉仕の道

植田新太郎 (東京RC)

私は、RC入会前東京青年会議所のアクティブなメンバーで、日米、日中といった国際関係の担当役員を経て、1977年度理事長として青少年の健全育成をめざし、腕白相撲を立てました。相撲は、本来礼儀に始まって礼儀に終わると言われ、教育的要素の強いものです。敗者に対する思いやりも学べるのと、JCの教育事業としてふさわしいと始めたものです。東京23区の小学校3~6年生を対象に、予選を勝ち上がった勝者が、当時蔵前にあった国技館で闘います。これが全国に広がり、34年間JCの長寿事業に発展しました。全国で現在5万人規模の参加がございます。

秋季例祭



東京JCの長寿事業わんぱく相撲

入会当時RCについての予備知識を持ち合わせておらず、紹介者に「ロータリーとは一体何をやるところか」と聞きましたところ「バッジをつけて例会に出てご飯を食べて帰ればいい」とシンプルなレクチャーでした。それは「習うより慣れよ」という親心だったと思います。東京RCでは、入会すると自動的に親睦活動委員会に所属します。ロータリーはまず親睦からという意味では、非常によい制度だと思います。当時若かったので違和感はなかったのですが、隣には自分の父親のような年配の、新聞やテレビに登場するような方がたすきをかけて立っておられるのには驚きました。

入会後、JC上がりは使い勝手がよいということで、ロータークト委員長を振り出しに、会員の中でも一番多くの奉仕の機会を与えていただいたと思います。私が生まれたのがちょうど日中戦が始まった1937年。それから敗戦まで8年間、非常に暗い時代に少年期を過ごしました。しかも小学校入学直後に小児結核にかかり、小学校を8年がかりで卒業しました。厳しい状況下で特効薬もなく、栄養をとつて安静にするのが養生で、食べ物にも事欠く時代ですから、終戦後まで生きながらえたのも奇跡的です。終戦後、ストレプトマイシンで命拾いをしました。元気になってからは、人様のお役に立ちたいと強く思いました。母校の創立者、福沢諭吉先生の教え「独立自尊」がその後人生の恰好の指針となりました。

JCもRCもすばらしい人の出会いがありました。東京RCの継続テーマは「知人から友人へ」です。ロータリーの創始者ポール・ハリスがなぜRCを作ったのかという理由に「寂しかったから」と言ったことからも、仕事を離れて親しい友人を得る、この最高のステージがRCであると思います。その素晴らしい人達のおつきあいをいただくためには、自分自身がそのレベルに近づく努力、絶え間ない自己啓発が必要ありました。この二つの団体との巡り

会いなしに、今の自分はなかったと確信しています。ポール・ハリスの精神をあらわした四つのテスト、これは非常によくできていると思います。職業奉仕とは、この四つのテストをいかに企業経営に活用していくか、ということにつくると思います。我が国にも、家内の父方のルーツである近江商人の言い伝えに、400年以上前から「三方良し」という言葉があります。この言葉を実践するための言葉として、四つのテストがあるのではないかと思います。英語のロータリーソングの一節に「One profits most who serve the best」というのがあります。「もっともよく奉仕するものもっともよく報われる」と訳されていますが、これも素晴らしい一節であります。日本の言い伝え「情けは人のためならず」が同様な意味合いだと思います。格言を絵空事に終わらせないで、いかに実行していくか、がロータリアンにかかる使命ではないかと思います。

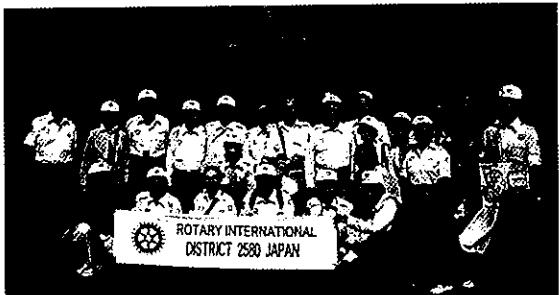
入会後、自分が関わった奉仕活動を時系列でお話いたします。ボリオは、第2580地区麹町クラブのメンバーだったと思いますが、二人の方が今から30年以上前にインドの悲惨な状態からボリオのワクチン提供を始め、これが全国、全世界のロータリーに広がり、財団も動かし、世界中のボリオの発生率をほとんど零にした、これはロータリーの素晴らしい貢献だと思います。

米山奨学会については、クラブのカウンセラーとして韓国、台湾からの奨学生のお世話を活動の意義を痛感して以来、地区の米山委員長、奨学会の諮問委員評議員を歴任。昨年から当館の理事を務めるなど深く関わさせていただいています。

2000年からは、10年間にわたって地区をこえてカンボジアの対人地雷除去が行われました。徳増PGは、地球上に1千万個埋まっているといわれる対人地雷で、子供達が被害を受けていることに心を痛めて、世界中の地雷を除去するには100年かかると、いわれている事業にチャレンジされています。地雷を除去した土地をロータリーのクリアランドと命名し、2002年の第一号から10年間にわたり1年に一つずつ増やしていく。実際には東京RCの資金だけで東京RCクリアランドも完成しました。投じられた資金の総額は約1億5千万円ですが、現地のコストに換算しますと膨大な額になります。期間を10年と限定したのは、地雷除去の活動成果をあげるには少なくとも10年はかかるだろうと想定しました。その結果、地雷除去された土地は、東京ドーム約100個分

秋季例祭

にあたります。2万6千人の人々が地雷の恐怖から解放され笑顔がもり、平和な生活がおくれるようになりました。ロータリーが掲げる人道目的の奉仕活動が、立派な花を咲かせたわけです。



地雷源に向かうカンボジア空軍ヘリコプター

現在東京RCで設置されたチャレンジ100という委員会は、10年後に迫った創立100周年を見据えた特別委員会です。今年地雷除去10年の区切りを終え、今年からカンボジアのフォローアップはどうするか、学校を建てるとか医療支援を行う等を検討した矢先に、あの大地震が発生しました。現在、急遽その方向を被災者支援に向け、息の長い支援をどのように行うかについても、特別委員会で検討しています。

今年度2580地区水野ガバナーの方針は、「簡素にして充実」です。このビジョンは、対人地雷除去を提唱された徳増PGの時掲げられたビジョンと同じです。世界中でロータリアンの数が減少している、ロータリーの組織運営も簡素化する必要がある。これは我が国の政府に対しても声を大にして言いたいところです。具体的にはガバナー月信をWEB化して発信する、また、地区大会も2日間開催を1日に短縮する。ガバナー公式訪問も、複数クラブ合同で行う、等を皆様のご協力により実施しております。一方で、会員の減少や退会防止には例会の充実、楽しいクラブ作りを推進してほしいという方向をうちだされています。このような課題はすべて私共クラブ奉仕委員会がカバーすべきものである、ということで今年度色々なプログラム活動を開始しています。楽しいクラブ作りに役立つようにと地区内71クラブが現在実施中の親睦活動プログラムについてのアンケートを実施し、よさそうなプログラムを各クラブでピックアップしていただくことも考えております。例会の充実については、2580地区ではロータリアンに対して例会で卓話をしてもらいたいと依頼しており、卓話者リストができあがっています。このようなことを通じて例会の充実をはかり、できるだけ会員の退会防止に努めたいと考えています。クラブ奉仕委

員会では、新入会員勧誘に役立つようなプラン作りをやっているところです。一方で、クラブや会員数の減少を直視して、どのように対応すべきかについても、一年間かけて討議をして、何らかの提言をガバナーに提出してみたいと考えています。実情に見合った奉仕活動をやる。組織運営についても、工夫していく必要があるので、と考えています。

米山記念奨学会につきましても、我が国は今回の大災害と原発事故により、明治維新と敗戦に次ぐ国難に迫られていてクラブ、会員数の減少に比例した寄付金額の恒常的な減少があります。寄付金額に見合った奨学生数の変更、現在年間800人体勢の見直しをせざるをえないかと、これにつきましてはぜひ板橋理事長からも補足説明をして頂きたいと思います。

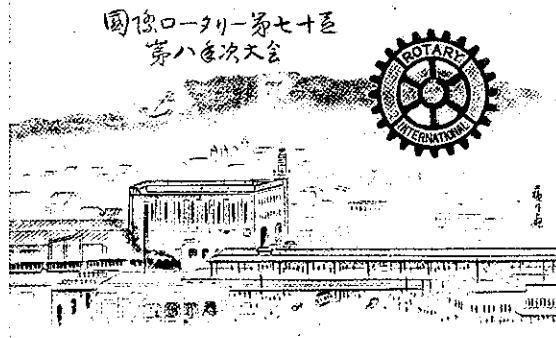
現在、米山奨学会というのは国内の外国人学生に対する奨学生です。しかし、仮に定款を変更して、今回の震災で発生した実際に1000人という震災孤児への奨学生支給を実現していただければ、こんなに信頼できるカウンターパートはない。ここから国内のロータリーからの寄付金が増加するのではないか、と可能性を考えています。もう一つは、外部からの資金調達。これは現在ほとんど行われていないようですが、国内の被災孤児に対して、ロータリーの米山奨学会が奨学生を支給するということがPRされることになれば、ロータリー以外の民間人あるいは法人からの寄付の増額が見込めるのではないか。これについて一考を要するところではないか、と考えています。グローバルに見ても、経済先進国は長期に亘って経済成長にかけがりがみえて、その運営に苦慮している一方で、RIは発展途上国に対して、積極的に新しいクラブの誕生を持ちかけることが重要である。特に東欧諸国、そしてこれは体制上非常に難しいけれども、板橋理事長からお話をあったように、団体の活動を禁止している中国で、米山奨学会のOBが学友会を2つ作ったことも、画期的なことではないかと思います。その活動方針の中に、奉仕という一言を入れてくれたこと、これによってあの人達が起爆剤になって、中国に仮にロータリーが誕生するということになる。これは本当にロータリーの歴史上エポックメイキングな事例になるのではと考えています。その必要性というのは、私はやはり拝金主義が横行している中国にこそ、ロータリアンの精神をうえつける絶好のチャンスではないかと思います。以上私のロータリー観のようなことをお話しさせていただきました。

国際ロータリー第70区 第八年次大会（1936年・神戸）の記録から

浅田光二（志木RC）



この度、偶然にも戦前の日本ロータリーの創世期ともいべき、全国一地区時代の年次大会記録を入手した。朝吹常吉ガバナー、井坂孝、村田省藏両パストガバナーの大御所ご健在の頃の年次大会の180ページに及ぶ、準備期間から大会期間中、果ては事後の最終決算の記録までの貴重な資料は、時に生のままの先達の肉声が聞こえるような錯覚に陥る程の充実した大会であったことが窺える。



ちなみに大会実施日は1936年5月2日～3日で、大会会場は神戸阪急会館をメインに、神戸オリエンタルホテルを研究懇談会場等に活用しての大会運営であった。この大会に参加したクラブは、アルファベット順に、福岡、岐阜、浜松、広島、今治、金沢、京城、神戸、京都、門司、名古屋、帯広、岡山、大阪、小樽、新京、札幌、静岡、台北、高雄、徳島、東京、横浜、四日市の24クラブであった。なお、この時点で、他に大連、奉天、哈爾濱（ハルピン）、釜山、旭川の各クラブがR Iの認証を受けており、更に『ロータリー日本50年史』によれば、この年の5月には郡山RCが誕生している。

実はこの年（昭和11年）初頭の地区の会議で5月に年次大会開催を神戸クラブが引き受けたことは、『50年史』でも明らかであるが、2月23日のロータリー創立記念日の3日後には、なんと東京都心で数日来の積雪を赤い血に染めた二・二六事件が発生し、多くの重臣、閣僚が襲撃されて、多数の死亡者が発生。帝都東京に戒厳令が布かれる事態となった。当時、筆者は確か小学校3年生であって、難しいことは理解できる筈もなかったが、ラッパ管のついた古いラジオにかじりついて、戒厳司令部から発表される市民への指示事項を緊張して聞いていたのを明らかに記憶しているので、（万一、鎮圧部隊と叛乱部隊との間に戦闘が起きた場合の帝都市民への注意事項が繰り返し放送されていた）子供心に国内に非常事態の起きていることを感じていた。

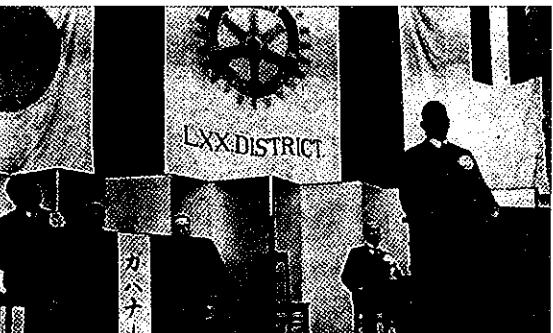
余談になるが、その後私が旧制中学校に進学後、戦時体制が進み、中学校にも軍の配属将校が配置され、学校教練が正式科目に編入されるようになった。その頃一人の若手の教官が、野外演習の往復時に中学生に軍歌を歌いながら行進させたが、その中の一つに「汨羅の渦に波騒ぎ、巫山の雲は乱れ飛ぶ、混濁の世に我立てば、義憤に燃えて血潮湧く」という聞き慣れない難解の語彙の続く「昭和維新の歌」というのをよく歌わされた。これは二・二六事件に先立つ五一事件という昭和7年の軍の反乱事件の首謀者、三上卓の作詞で、この二・二六事件の反乱将校達が兵士の士気を鼓舞するために大いに歌わせたものであると教えられた。その後、しばらく忘れていたが、終戦後は屡々右翼の街宣車のスピーカーから聞こえてくることがあり、私達の年代には遠い昔の苦い思い出のメロディーである。

『50年史』によれば、第70地区では、この変事に際し、神戸の年次大会の開催準備も既に案内状の発送寸前であったので、緊急協議の結果、大会にご臨席を願うことになっていた東久邇宮、賀陽宮両殿下のご来臨をご遠慮することで、大会そのものは中止や延期をせず実施することになったと記されている。国家非常の際とはいえ、極めて短日時の間にこのような予定変更を策定し、各方面の了解を取り付けられた事実は、この年次大会の実施を約2ヶ月後に控えた時点での米山梅吉氏、芝染太郎氏、森村市左エ門氏等を中心とする指導者方々の偉大さを物語るものであろう。実は、この事件を境にして、天皇はもちろん皇族、重臣、大実業家などに対する特高警察や憲兵隊の白色テロに対する警戒は、一段と厳重になった。

私事で申し訳ないが、この昭和11年の10月末から11月初頭にかけて、関東地方の一部で大規模な陸軍の演習があった。その際、北白川宮永久王殿下が統監とかいうお立場で、最終日に一泊で武藏野平野の一画である当地方での紅白両軍の激突を観戦される、ということになり、御宿泊先を選定した際に、たまたま我が家に白羽の矢が立った。県当局を通じて、町役場に話が来たのは、半年も前の四月頃であった。そして、確定までに、親戚・姻戚に危険思想の持ち主はないのか？前科者はいないのか？等が特高によって調べられ、私達家族全員、毎月検便と身体検査の結果を報告させられた記憶がある。その他、家屋と構外との隔絶が完璧か、浴室浴槽等の改造まで、毎月のように検査官が見えていた。こ

れらは、ちょうど第八年次大会と同年の出来事であり、今更ながら大変な気苦労と出費を強いられたわけで、明治天皇の第七皇女の長男ともなると、まさに雲上人のような扱いであったのである。翌朝、ご出立の際、事前にご許可をいただいて、東京から写真師を呼び、殿下を真ん中に、前夜来別室にお供として泊まられた侍従武官と宮内省属官、そして私の両親と私達子供達の写真が残っている。

さらにこの年次大会は、もう一つの想定外アクシデントに直面する。それは、この大会のR I会長代理として国際ロータリーから派遣されていたマッカロー元会長が、途中立ち寄った中国で天候不良となり、日本の第70区年次大会に来るための船に乗り損なってR I会長代理不在



井坂孝パストガバナーの講演

の年次大会となってしまった。この結果、大会プログラムを急遽変更することとなり、米山梅吉、井坂孝、村田省藏の3パストによる講演会に変更された。『50年史』にはこの箇所の記事の中で「3長老（上記）を〔ロータリーの三銃士〕に例えるものもあったが……」と書いているが、この言葉は、大会記録の米山さんと井坂さんの講演記録の間に囲み記事で出ているので転記してみたい。これは、東京日々新聞に徳富蘇峰翁が寄せた文章とのことで、日本ロータリーについて述べたものである。

『年次大会記録』によると、マッカローR I会長代理は、悪天候により出席できなくなった経緯を、第70地区宛連絡するとともに、米山梅吉氏宛にメッセージを送り、R I特派代表代理として米山氏にメッセージの代読を依頼した事が記録されている。



宮様と家族の写真（向かって一番左が筆者）

日本は不思議な国で、輸入した外國製品を模倣して原産地に於けるよりも立派な優れたものを作り上げる。精神的に方面に於いても然りと云つて東京日々に蘇峰先生が、その一例として日本のロータリー俱楽部が世界のどの國に於けるよりも異常な發達を遂げて居るがこれは所詮眞面目な社交家にして然も実行力に富んだ歴代のガバナーのお蔭だと思ふ。茲に吾人はロータリー三銃士として前ガバナー米山、井坂、村田の三長老の功績を日本ロータリーの名に於いて高らかに誇りたい。

さて、支那で悪天候に足止めされて、大会当日にR I 本部の特派代表の大役が果たせず、米山梅吉氏にすべてを委任せざるを得なかったマッカロー氏は日本ロータリーの役員たちと晩餐を共にした後、本部に提出するレポートを作成してこの大会は終わったのである。

▶ 没後20年 東ヶ崎潔氏と共に歩んで

島田 貫司



日本人初の国際ロータリー会長東ヶ崎潔氏は、明治28(1985)年9月24日、日系移民二世として、サンフランシスコにて、貿易に従事する傍ら、生涯をキリスト教自費伝道に捧げた東ヶ崎菊松の9人兄弟の長男として生まれた。

両親は、キリスト者として明治初期の日本人渡米移住民の苦難を、献身的に助けた。父・菊松の生き様は、この姿を幼少期から見ていた9人の子供達のそれぞれの生き方に強い影響を与えた。

潔氏は、米国で大学教育を受けて後、第一次世界大戦に日系米国民として米国陸軍将兵となってフランスへ参戦。帰国後、日本キリスト教界の重臣、同志社の創立者の一人、金森通倫の長女と結婚し、2男1女に恵まれた。1933年に日本で暮らす決心をして、日本へ移住した。やがて日本語にも慣れ、語学力を活かして日本経済連盟、日米協会、第7回世界教育会議日本事務局、ニューヨーク万国博覧会日本コミッショナーなど、それまでに培った世界各国の人脈を通じ、日米の橋渡しとして活躍された。

カロー氏は5月4日の午後遅く神戸に入られた。実は、大会に先立ちマッカロー氏夫妻は横浜に上陸し、東京のロータリアンと交歓した後西下、神戸の国際サービス委員小高氏は大阪の車中でお迎えし、再び逢う日を約束して別れた後、そのまま支那へ渡った。ところが、大会に間に合うように上海に来たところで悪天候に遭遇し、到着が遅れてしまったわけである。

これは、マッカロー氏にとっても日本のロータリアンにとっても、誠に不幸な出来事といわねばならない。

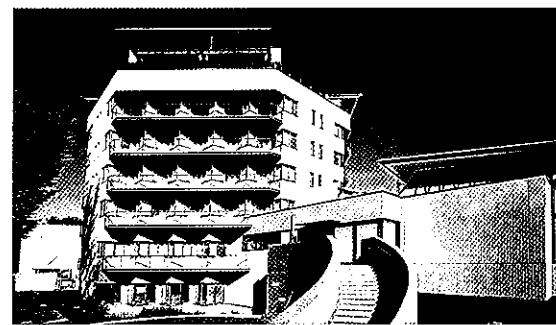
マッカロー氏は日本ロータリーの役員たちと晩餐を共にした後、本部に提出するレポートを作成してこの大会は終わったのである。



東ヶ崎 潔 氏(右から二人目)とご家族

昭和16年、ジャパンタイムズ編集局長となる。戦中の軍政下、英字新聞の発行に携わり、昭和21年、社長に就任した。当時の新聞発行は、占領軍の下、検閲と発行停止など苦労されながらも、社業を発展させた。

戦後は、様々な復興事業に参加した。三鷹にあった軍需工場の跡地に、世界に通じる大学の設立の話があがった時には、設立資金集めのために、度々渡米した。この成果が実り、1949年、国際キリスト教大学(I C U)が設立された。I C Uには、1999年国際ロータリー平和センターが創立され、2010年秋には「東ヶ崎記念ダイア



ダイアログハウスの外観(国際基督教大学提供)

ログハウス」が完成した。この「ダイアログハウス」は、オフィス、国際会議室、短期学生寮、研究者寮などを合わせ持つ複合施設である。ここに、I C U初代理事長東ヶ崎の名がつけられたのは、氏が日米両国の狭間で悩み苦しみながらも、その相互理解に尽力したことへの感謝の表れであり、これからも末永くその遺志を広めていこうという大学の考えだろう。

ある時、原爆で被害を受けた日本女性を米国で治療させて欲しいとの手紙を、米国の団体から受けた。そこで、25名の原爆乙女と二人の外科研修生を送る計画を、関係先と進めた。しかし、民間航空会社の協力が受けられずに困っていた。東ヶ崎は、もしも自分の娘が原爆を受けていたら、と思うと一人でも助けたいという思いが強かった。この時、東京ロータリー創立50周年記念祝賀会へ招待されていた在日米国空軍司令官のハル氏が「私はオハイオ州のロータリークラブの名誉会員」と話された。そのご縁で、原爆乙女一行は空軍輸送機で渡米することができた。ハルが米空軍の司令官であったことと、ロータリーの友情が相俟って実現したものであった。

振り返ってみれば、世界の不況、株価の暴落、恐慌、第二次世界大戦、敗戦等々。苦労の多い生涯だった。戦後の復興、ロータリーの復活、数々の実績を評価され、1968年国際ロータリー会長に72歳で選ばれた。米国生まれの日本人。語学力と行動力で地道な尊きの人生だった。最も優れたR I 会長の一人と評された。その後、ロータリー財団の役員として、また元R I 会長として93歳頃まで、精力的に活動を続けた。

私は、1962年米国留学から帰り、米国海軍横須賀基地教会で5年間勤務した。そこで東ヶ崎氏

に出逢った。そして、1968年、氏が社長を務めておられた富士海外旅行㈱に就職した。まだ海外旅行が現在のように普及していない時代から、数多くの旅行のお手伝いを手がけてきた。もちろん、国際ロータリ一年次大会旅行、インタークト、ロータークト、G S E 交換留学生、ロータリー財団留学生、ロータリー関係海外旅行手続きの業務、添乗などにも従事してきた。晩年の20年近く、行く先々にも同行してきた。幸いにも、氏が96歳で生涯を閉じる3日前まで東ヶ崎氏に仕え、故人からたくさんのことを学び、また多くの人々の紹介を受けた。私が東ヶ崎氏の言葉として印象に残っているのは「パーティーション」「参加せよ。いつどこでも行事に参加せよ」「人に逢え、人と語れ」など、たくさんある。



晩年の東ヶ崎氏と筆者

自らを犠牲にして人に仕え、奉仕の心で生きた人、ロータリーに生かされた方だった。東ヶ崎氏は、晩年人生を振り返り「ロータリーは人を作る。自分を育てる。友達を生み出す。事業を成功させ、奉仕の喜びを体験する」と語っていた。

最期は、米軍から返還交渉に尽くした東京築地の聖路加病院にて、眠るように息を引き取った。東ヶ崎氏の人生は、太平洋の架け橋となられた96歳の生涯であった。没後20年経ったが、ロータリークラブの国際奉仕が発展し世界平和に大きく貢献していることからも明らかのように、氏の功績は輝きを失っていない。

次年度は、日本人三人目の田中作次氏が、R I 会長になられると聞いている。東ヶ崎氏の後を継いでくれる日本人がおられることは、誠にありがたいことと思う。田中氏のご活躍を心からお祈り申し上げたい。

米山先生と和田家のこと

— 和田竹造さんの墓参を契機として —

神崎正陳（茅ヶ崎湘南RC）



私は1976年の秋にロータリークラブの会員になつたので、会員歴35年と數か月を閲したことになる。取り立てて長い年数ではないが、会員であることの縁で知り得た何人かの偉大な人間像を偲ぶことの幸せを味わってきた。昨年11月24日高取町は光明寺に、米山梅吉先生の実父和田竹造さんの墓に詣でる機会を得た。以下に墓参の経緯と、その結果知るようになつたいくつかの事実と疑問について、私見を記す。

米山先生について知ろうとするとき不可避なことは、昭和35年5月4日に青山学院初等部が発行した、『米山梅吉伝』と題する617頁におよぶ大部の書物に当たることである。この本は、背表紙に「米山梅吉」と先生の揮毫が印刷されていることからも、全巻が先生の「伝記」ではない。巻の冒頭に佐々木邦著「創意と奉仕の一生」と題する狭義の米山梅吉伝が置かれ、以下「追憶集一」、「事業のあと」、「追憶集二」、「米山先生と政治」、「藍壺文藻」という五つの独立の章、それに「序」、「年賦」、「あとがき」「編集後記」が加わって、米山先生の事績を顕彰する1巻の書物になっている。したがって佐々木さんの「創意と奉仕の一生」が眞の意味での米山先生の「伝記」であることは明らかなので、以下に「創意と奉仕の一生」の中の文を引用するときには「創意と奉仕」p.〇〇と略記し、他の文章例えば「追憶集一」文を引用するときは、「追憶集一」P.〇〇と略記することとする。

I 「創意と奉仕」の、竹造さんの家族についての記述

1 「創意と奉仕」は、18世紀のイギリス文壇

の大御所サミュエル・ジョンソンの伝記とその著者ボズウェルについて、佐々木さんならではの興味深い話題の提供から始まる。佐々木さんの「伝記観」の表明ともいえる。

統いて佐々木さんは「少年時代」と章を改めて以下のように記している。「米山梅吉さんは明治元年2月4日に東京芝田村町で、士族和田竹造氏の三男として生まれた。お母さんはうたと言って、伊豆三島神社の宮司日比谷氏の息女だった。…お父さんの和田竹造氏は大和の高取の藩士だったが、何石の禄を食んでいたのかわからない。…5両に3人扶持の足軽も変改と共に士族になったのだが、そういうのは国許の仲間屋敷に住んでいる。和田氏は江戸に出て田村町に住んでいたのだから、相当の侍だったと思われる。

米山先生の名梅吉というのは侍らしくない。梅之助とでも付けそうなものを梅吉としたところに、お父さんの精神的動搖が察しられる。先生自身もこの梅吉という名を好まず、改名しようと思っている中に、米山梅吉で通ってしまったのだという。兄さんが二人あって、栄次郎、菊松という。…その頃の知識階級は学問を専門とする漢学者、国学者、画家、侍、神官に限られていた。その他は読み書き算盤が精々のところだった。お父さんが侍、お母さんが神官の娘なら、米山さんはその頃として最も教養のある家庭に生まれたことになる。…お母さんは八十歳という長寿を樂しまれたが、お父さんは早く他界されたらしい。…お父さんの墓所が高取の光明寺にある。先生の少年時代からの親友稻村氏が近くの丹波市に転勤した時、お詣りに行つたけれどももう何十年も前のことだから、当然戒名も享年も覚

えがない。(P.11-13.)」

佐々木さんは、米山先生の生年月日や先考の没年等について、「創意と奉仕」の最後の「補遺」において以下のように記している。「実は米山さんの生年月日も初めは正確なところが判つていなかつたのである。昔の偉人にはそういうのが多いと言つて著者は笑つたが、これは先生が性分として自己を語ること少なかつた証拠にもなる。調査の人たちの手で明治元年2月4日とハッキリしたが、先考和田竹造氏の没年が全然分らなかつたので、先生の手紙によって幼少の頃と推定して置いたら、これは材料係の人達の親切で奈良県高取の菩提寺のお坊さんと連絡がついた。その返書によると、先考は明治5年7月15日に四十三才で亡くなっている。…過去帳に奈良県貫属士族とある。貫属とは侍でもお給人や足軽と違う上級の意味で、身分がよかつたことも分かつた。(P.124.)」

2 「創意と奉仕」の米山先生の出生にまつわる、特に実父母に関する記述は、ほぼ上の引用に尽きると言つてよいと思う。ただしⅡで述べるように、竹造さんの亡くなった日は、明治5年7月12日の誤記であり、過去帳に貫属士族とあるとの記載は、「墓碑に貫属…とある」とするのが正しい。米山先生の「伝記」としては、この小文でたびたび引用する「創意と奉仕」の他に、長井盛至著『米山梅吉と日本のロータリー』と内田稔著『米山梅吉』等を挙げることもできるだろうが、これらの伝記も、実父母のことに関しては、「創意と奉仕」の記述の域を出ないようだ。なお『米山梅吉の遺音』(以下『遺音』という。)は、竹造さんについては、「米山梅吉は東京芝田村町に明治元年に生まれた。父は大和國高取の藩士和田竹造、…」と記述し、注で高取藩について『高取町史』に基づいた説明がなされている(P.3.)が、竹造さんの地位、家系、墓所等については論及していない。しかし、もううたさんについては、「母は三島神社の神官日

比谷右京の娘うた…」と『伝』同様に記述し、注でさらに突っ込んで「三島大社には、江戸時代から明治初期において、神主矢田部氏のもと、神職として神事奉仕を行う社家が30家ほどあった。これが5家(一時6家)の社家番頭に割り振られていた。日比谷氏は、その社家番頭の一家であった。三島大社に現存する資料その他からの推定では、米山の母親うたの父母は、日比谷右京(鍵蔵)、とり、であろうかとする。(P.4.)」としている。

これを要するに、米山先生の実父母に関することは、実母うたさんの父方が三島神社の社家番頭という格式にあったということ以外は、「創意と奉仕」に記載されている以上のこととは全く分からぬということになる。

II 竹造さんの墓所について

1 「創意と奉仕」には上述のように、「お父さんの墓が高取の光明寺にある。(P.13.)」と記され、米山先生夫妻や稻村真里氏が参詣したことが言及されているのだが、私は先考の祭祀が和田家で行われ、これに米山先生も出られたとか、ロータリー運動が盛んになってから、米山先生を慕うロータリアンの有志が竹造さんの祭祀を執り行った、というような話は寡聞にして知らない。試みに「友」のバックナンバーを調べてみた。1971年11月号に権原RCの辻村氏が墓参されたことが、1989年3月号に池田くれはRCの中川氏が光明寺まで訪ねながら墓碑を発見するにいたらなかった経緯が投稿されている。また米山記念館館報第7号に西宮RCの市居嘉雄氏が1991年のお盆に光明寺を尋ねられながら、住職も知らず、結局墓碑を発見するにいたらなかったことを記しておられる。

私はこの状態が1991年以降今まで続いてきたことが不可解であったので、一度光明寺を訪ねてみたいという気持ちを抱き続けてきた。8年くらい前だったと思うが、同じクラブの松宮PGと一緒に高取を訪ねたことがあった

のだが、光明寺の住所、電話番号を記載したメモを忘れるというへマの挙句、植村家の菩提寺宗泉寺を訪ねていろいろ尋ねたのだが、藩主とその一族以外の藩士たちのことについては全く分からぬまま帰ってきたことがあった。

昨年司馬遼太郎の「街道を行く・壺坂道」を再読したのがきっかけとなり、再訪の思いが募り、インターネットで光明寺の住所と電話番号を調べ、不躾に過ぎるのではと躊躇しながら、光明寺に電話をかけてみた。

住職は留守で奥様と思われる方が応対してくれましたので、ロータリアンとして日本のロータリー運動の先達で三井信託銀行の社長等をされた米山梅吉先生のご尊父和田竹造氏の墓に詣でたいという希望を持っているが、貴寺に和田竹造氏のお墓があるのでしょうかとお尋ねした。住職が戻ったらご返事いたしますとのことで、私の住所氏名と電話番号をお伝えした。数日後住職から、お墓があるという電話を留守宅に頂いた。私は早速住職宛に手紙を書き、米山先生とロータリー運動のことについて、若干の説明をしてお寺に伺いたい旨を伝えた。

住職鷲尾隆司師からは、折り返し葉書で次のようなご返事をいただいた。「…当寺に住持してより三十有余年になりますがその間ロータリークラブ関係の方より故和田竹造氏の墓所の所在の問い合わせいただいたことがあります。ところが無縁に近い状態の為不明のまま今日にいたっていました。今回過去帳に記載の和田竹造氏の戒名（徳山淨隣信士位）と墓石に刻まれた戒名が合致しました。ロータリークラブを創立された米山梅吉氏のご尊父様のお墓にしては少々淋しい感じがあるかもしれませんがどうぞお気をつけてご来寺下さい。」

折しも大阪のロータリー研究会に参加する予定だったので、早朝の東海道新幹線から近鉄に乗り継ぎ、光明寺を訪れた。

2 光明寺は近鉄壺坂山駅から徒歩5・6分ほどの距離にある開創天平宝字4年という浄土宗の古刹である。御本尊は鎌倉時代の阿弥陀如来木座像、植村藩の紋の刻された立派な長押子や、枯山水の庭も望める。和田家と光明寺とは全く無縁になっており、回忌法要もなされていないため、住職も竹造さんの墓碑が存在するのか、また何処にあるのか存知なかつたようだ、私が連絡した先考の俗名と没年から過去帳と照合して、雑草等に覆われていた竹造さんの墓碑の確認をしてくださったのであった。

本堂の裏側の傾斜地に沢山の墓碑が並び、向かってその一番右端の辺りにちょっと離れて佇んでいるような感じの簡素な竹造さんの墓碑に私は巡り合つた。かなり風化が進んでいて墓誌の判読はなかなか難しい。正面は、



光明寺の住職と竹造さんの墓碑

丸に二つ引の紋の下に「徳山淨隣信士」と戒名が読めるが、右側面は、「明治五壬申…七月十二…」と、左側面は、「奈良縣貫属…(士族?)」と刻されているように見える。他に親族の氏名など一切刻されていない。

住職のご厚意で墓には花と水が供えられており、寒風の吹く中で住職が読経して下さる

なか、私は香を焚いて墓前に額づいた。斜面で膝を折るのもなかなか難しく、私は片膝を地面につけて合掌しようとした。その時私は何とも表現し難い衝撃のようなものにたちろぐ己を意識した。うまく説明することができないが、私が己の中につくり上げてきた米山先生像が変化を来たしたのではない。あえて言えば今まで全く気付かずにいた先生を囲む未知の不確定な世界を垣間見た驚きに圧倒されたようだ。

寺内に案内され、住職から過去帳も見せていただき、いろいろ話を伺つた。過去帳には、上から楷書で「徳山淨隣信士」とあり、次に小さな字で二行に分けて右側に「七月」、左側に「十二日」とあり、その下に戒名と同じ大きさの字で「和田竹造口」とあり、俗名の左下部に小さな字で「四十三才」と添書きされている。過去帳は年ごとに綴じてあるようで、没年の記載がなくても明治五年であることは間違いない。佐々木さんは、「過去帳に奈良県貫属士族とある」書いているが、そのような記載はない。過去帳には同じ頁に没月日順に5~6行が記載されており、それぞれ故人の住所の町名等が記載され、又誰々の母あるいは娘というような親族との続柄が記載されているが、竹造さんに関しては何の記載もない。ということは、亡くなった時に、父母（竹造さんの年齢から父母が生存していた可能性はある）も、妻子も、兄弟姉妹も、高取にはいなかつたことを推測させる。そうだとすると、光明寺は元々和田家の菩提寺ではなかつたと考えるべきだ

ろう。住職にお訊ねしたが、竹造さんの縁者と思われる人の墓はないそうだ。

Ⅲ竹造さんに関する資料の不足

1 明治維新という大変革の渦中にあったとはい、武士という身分にあった竹造さんが、佐々木さんが書いているように「相当の侍であった」、「身分がよかつた」とするならば、高取に何らかの資料が残っていても良いだろうと、「創意と奉仕」に記載されている佐々木さんの推測に不足を感じるのは私だけではないだろう。しかし、光明寺を訪ねた時の住職の話によても、高取町が発行している『高取町史』を見ても、高取藩士たちの人間関係や、維新に際して辿つた運命などについて、竹造さんに関わる資料は未だ見出せない。

「編集後記」に、資料不足に対する弁解とも取れる記述があるので、以下に関連のある部分を引用する。下線筆者。

「佐々木先生が補遺を書かれたのは、資料に不備な箇所があった為であります。正誤外の面白さもあるので、係の罪をお赦し願います。…伝記は大抵、祖先の系譜からはじまるのが順序ですが、本伝記は人物研究論が緒言になっています。米山先生の創意にふさわしい構想と言えます。…和田氏の主家、植村家のことをここに添えます。…植村家は芝山内裏の神谷町付近に本邸があり、愛宕町または田村町に中屋敷があり、古河町に下屋敷があつたようです。維新後は子爵を受けられ、高取町下小島に本籍を置いて、東京に本邸はなかつたらしい。これは薩長の明治政府に仕えようとされなかつた為かと思われます。從て維新には全藩が高取に引き上げたと見られます。

和田家は田村町や愛宕町に縁が深かつたようですから、中屋敷住居をした侍格であったことに間違いないでしょうが、禄高は植村家の記録以外に調査の道がありません。その点がまだ欠けています。

父君竹造氏の逝去年月がはじめ明確でなかつ

たのは、資料係が遠出をしなかった手落ちでありました。なお代々江戸詰であったので高取には親戚はあまりなかったと寺の過去帳を見て、住職さんは教えてくださったそうです。

(P.614-616.)

- 2 「本伝記は人物研究論が緒言になっています。」という上の記述は、佐々木さんの「創意と奉仕」に対する伝記刊行会代表者小宮山伍助氏および資料兼編集係の共通した認識であり、かつ「序」を書いた豊田實氏も同じ考え方で立っている。偉大な人物は極めて多面的である。私は佐々木さんは、より突っ込んだ調査をされたかったのだと思う。そして調べたけれども、より確実な資料が得られなかつたのではないかと思う。以下編集後記の「弁解」について考えてみる。
- 3 植村藩の本邸、中屋敷、下屋敷の所在地が三か所に分かれていたことは『伝』には詳しく言及されていないが、米山先生誕生の地が田村町とされていることは実父母が中屋敷に居住していたことになるので、竹造さんの身分についての佐々木さんの推測は、根拠を持つと言えるだろう。

維新後植村氏が「高取町下小島に本籍を置い」とことは、おそらく戸籍の記載に拠ったものだろうが、「全藩が高取に引き上げたと見られます」とあるのは推測か、『米山梅吉伝』編集当時の光明寺の住職の話に根拠を置くものか、あるいはまったく別の資料に基づくものか明瞭でない。竹造さんの墓碑に奈良県貫属とあることは、ひとつの資料ではあるが、わずかひとりについての事実なので藩全体に及ぼすには不足である。しかし、全藩が高取に引き上げていたという事実があったから、明治2年6月18日に植村藩の版籍奉還が実現し、藩主植村家壺が高取藩知事に任せられる

ことに繋がったと、逆の推論の資料とするこども可能だろう。

和田家は代々江戸詰であったので高取に親戚がないという『米山梅吉伝』編集当時の光明寺の住職の話は、現に竹造さんの墓碑は、親類縁者らに囲まれることなく、過去帳にも同様親戚縁者と推定可能な埋葬者の記載も見当たらないこと、また『高取町史』の幕末の資料を見ても、高取藩士の中に和田姓を全く見ることができないことは、竹造さんが父祖の代から江戸に定住したいわゆる定府の藩士であった可能性を示している。そうだとすれば、三島生まれのうたさんと縁組をしたことでも自然なことであり、江戸に累代の菩提寺があつたと考えることも、決して無理な推論ではないことになる。そして、佐々木さんがはつきりと竹造さんの墓所は高取町の光明寺にあることを記しているにも拘らず、多くのロータリアンが光明寺を尋ねても墓参の目的を達することができなかつたこと、光明寺が竹造さんの墓が存在することを忘失するほどに、和田家との関係が途絶えていた、つまり無縁墓になっていたこととも符合する。

このことは、東京に和田家の菩提寺がある、あるいはあったことが判明すれば和田家の祖先を辿ることも可能であるということを意味する。まして、うたさんは栄次郎さんの家で亡くなつたとされているのだから、田村町に近い増上寺あるいは同宗派の寺院に葬られたのではなかろうか。この辺のことは『米山梅吉伝』が編集されたころだったら調べることができたと思われるが、米山先生を偲ぶ人たちの、「米山」梅吉先生という類い稀な人格に対する思い入れの深さが、実父母のことについての考証を疎かにした面が全くなかつたとは言えないのではないか。

米山梅吉の『蒸気船』

井 口 賢 明 (沼津北 RC)

【はじめに】 米山梅吉は、明治20(1887)年10月から明治28(1895)年10月までアメリカに滞在した。その間の多くがサンフランシスコで、ここでは、福音会を中心として、活動していた。

米山は、このサンフランシスコ滞在時代のごく短い期間、福音会の会員である松野菊太郎、岡部健太郎、大沢栄三等と共に贈写刷の新聞『蒸気船』を発行した。これは、米国と日本との間を通うものという意味をこめたもので、自分達の政治上の意見を故国に送るつもりであった。そして、「皆福音会に立て籠って梁山泊の昔の如く天下国家を憂へた論客であった」という。

前号、前々号で、「青年米山梅吉のサンフランシスコ滞在時代」という拙稿を掲載したが、『蒸気船』のことについては、誌面の都合でこれを差控えた。今回、稿を改めて、『蒸気船』のことについて触れてみたい。

とはいいうものの、この『蒸気船』、サンフランシスコ湾の霧の中に迷い込んでしまったか、現在一部も発見されていないという。したがって、その様子が全くわからない。タイトルからして、蒸氣船、蒸氣船あるいは蒸瀝船なのかも確定しない。ただ、『蒸氣船』第13号が明治22(1889)年9月20日、発禁処分をうけた際、同日付官報でその特定として、「蒸氣船ト題スル新聞紙第十三號」としているので、『蒸氣船』であったといつてよいであろう（ここでは、引用など特別な場合を除き『蒸氣船』とする）。

発行者は、米山梅吉、松野菊太郎、岡部健太郎、大沢栄三の福音会会員4人である。ここで、米山を除く他の3人の簡単な横顔を見ておく。

松野は、明治元(1868)年、山梨県で生れる。明治21(1888)年7月渡米、明治27(1894)年帰国。帰国後は伝道活動をする。そして、明治33(1900)年渡米、やはり伝道活動に携り、明治35(1902)年帰国している。その帰国後、東京伝道学校の

教授、さらには麻布クリスチヤン教会の牧師を長く務めた。

大沢は、文久3(1863)年埼玉県で生れる。明治17(1884)年司法省法学校に入学、米山より一足早い明治19(1886)年3月渡米し、4月に福音会に入会している。理屈屋で、福音会では、みんなが「法学士」といっていた。明治24(1891)年10月帰国、帰国後、慶應義塾商業夜学校の教師を務めた後、ビール会社の支配人となった。事業家タイプで、明治42(1909)年に渡米し、貿易会社や債券・株式売買の会社を設立、経営した。全米日本人会の副会長や桑港日本人会の会長を務め、現地で亡くなっている。

岡部は、福岡県生れ、明治25(1892)年に帰国、長崎の活水女学校（メソジスト派）に就職している。

【創刊の時期】 創刊の時期について次の考えのものがある。

① 明治20(1887)年というもの^{1) 3) 5)}

なお、このうちの『在米日本人史観』は、サンフランシスコでの最初の邦字新聞というが、明治19(1886)年4月10日発行の『東雲雑誌』というもっと古いものが発見されているので、少なくとも最初のということは、返上されなければならない。

② 明治21(1888)年というもの⁴⁾

これは、直接明治21年というのではなく、リバイバル〔宗教的な変異現象〕の前年という表現である。サンフランシスコでのリバイバルが明治22年であったので、その前年は、明治21年ということになる。

③ 明治22(1889)年2月というもの²⁾ さらに特定して明治22年2月18日とするものがある。

これは、明治22年3月21日付の新聞『日本』に、「桑港發児『蒸氣船』 桑港在留の日本人

は去月十八日を以て「蒸氣船」と題する電気板の雑誌を発兌せしか」という記事を根拠にいうものである。

以上のなかで、①、②は、記憶あるいは前の書物によるものである。『日本』の記事が発刊から1ヶ月遅れでのものであるが、発行された『蒸氣船』を確認しての記事であろうから、『日本』の記事を根拠に、明治22年2月18日の創刊とするのは納得しやすい。

明治22年というのは、米山にとってどのような時期であったのであろうか。米山は、渡米1年を過ぎ、周辺の状況も分るようになり、いわば無一文で日本を飛出してきた自身の日常生活も落着いてきたことであろう。そして、福音会だけでなく、サンフランシスコ邦人の間で存在感も示されるようになってきた。福音会では、明治21年9月には庶務委員に選挙されるなど、福音会の運営にも関わるようになってきた。自分でも何か思うことをしてみたい、そんな時期であったろうか。

【発行の間隔】 週刊、旬刊、月2回といろいろである。これを考えるについて参考となる次のような事実がある。

- ① 『蒸氣船』第13号が明治22(1889)年9月20日発禁処分となったこと
- ② これに関する明治22年9月22日付の『繪入自由新聞』に「蒸氣船と題する新聞紙の第十三號は去十九日横濱へ入港の米國郵船シチオフシドニー號にて齎し來りしを其筋に於て没収したる由」という記事があること
- ③ 明治22年7月1日付の『時事新報』に「左に掲ぐるは米國桑港耶蘇教福音會の幹事大澤榮三氏より此の程河北領事へ差出したる書面なりとて六月十日發兌の同港日本字新聞蒸氣船に見えたれば……轉載す」という記事があること

このようなことを念頭に、考えてみる。

『蒸氣船』に休刊がなく、明治22年2月18日付を第1号とし、順調に発行されたとすれば、発禁となった第13号は、週刊だと5月中旬、旬刊では6月中旬、月2回だと8月中旬の発行となる。

一方、サンフランシスコから横浜まで18日前

後を要するわけで、9月19日に着いた船は、9月1日前後にはサンフランシスコを出航している。したがって、持込まれたものは、すくなくとも8月中には発行されていかなければならない。もし、乗客が最新の『蒸氣船』を持ってきたとすれば、最も辻褄が合うのは月2回の発行である。これは、明治22年3月21日付の先の新聞『日本』に「右は毎月二回つゝ發兌するものなりと云ふ」という記事とも符合する。

ただ、乗客が何号かをまとめて持ってきて、そのうち第13号だけが過激な内容で発禁となつたということもありうる。また、月2回の発行とすると、発行日が1日、15日というのが普通であるのに、創刊号は2月18日であるし、時事新報が報ずるよう 「六月十日發兌の」 のものもある。さらに、明治22年7月には廃刊となっていたとの記述もある。これは後述のように、相当に理由がある。第13号の発行が8月とするのは無理がある。したがって、一概に月2回とも即断できない。

旬刊とするのは、発行者の1人松野菊太郎の「『蒸氣船』と題した贋写版の旬刊新聞を発行」という懐旧によるものである。発行者の1人がいうのであるから、相當に信憑性があるといわなければならない。しかし、同じ松野の述懐を根拠にしていると思われる『先駆九十年』では、「贋写刷の週刊誌『蒸氣船』を発行」したとある。旬刊の場合、発行日が10日、20日、30日といふのはないであろう。この点、創刊号の18日ということは措くとしても、時事新報が報ずる6月10日発行の『蒸氣船』があることに違和感がある。

『先駆九十年』をはじめ、『蒸氣船』に言及する多くのものが週刊である。創刊の日とされる明治22年2月18日は月曜日である。そして、明治22年7月1日付の時事新報が報ずる「六月十日發兌」という6月10日は月曜日である。週刊だとすれば、6月10日発行号は、創刊号と曜日が一致する。

しかし、週刊とした場合、第13号は5月中旬の発行となる。その第13号の発禁処分がいくら海を隔てているとはいえ、数ヶ月も経った9月20日というものは間に抜けている。乗客が複数の『蒸氣船』を持ってきていて、そのうち第

13号だけが過激だった考るのであろうか。また、『蒸氣船』は、苦学生である福音会の会員が自らの手で準備し、発行するものである。かれらは、この発行にかかり切っているわけにはいかない。週1回というのは相当な負担である。

このような問題点があり、現在の段階では、確定できないが、ここでは多数の考え方と同じように週刊であったと考える。

【発行の意図、目的】 『在米日本人史觀』これをうけた『在米日本人史』は、在米青年に對する希望感想を述べたものだとする。これに対し、『先駆九十年』は、自分達の政治上の意見を故国に送ることを目的としたもので、『蒸氣船』すなわちThe Steamerという名前は、後者の意味をこめて、米国と日本との間を通うものとしてつけたものであるという。

発行者の1人松野菊太郎の述懐に「自ら國士を以て任じ、同志の岡部健太郎、米山梅吉と協同して、遠く故国の政界に呼びかけるつもりで」『蒸氣船』を発行したとある。

米山についていえば、沼津中学時代から生涯の友であった稻村真里の文章がある。このなかに、米山が贋写刷の小雑誌を作り、論説その他いろいろの文章を載せ、自分のところにも毎号送ってきたという(『傳』のなかの「米山君と余」)。この小雑誌は、『蒸氣船』のことをいうのであるが、米山は、アメリカにわたっても、故国やその友人への思いを強く抱いていて、『蒸氣船』にそれを託したのであろう。米山の沼津中学時代の思い出に「好んで演説や討論などをして、能くその意味も判らぬ政治問題を喋々と弁じ立てたりしてゐた。さうして……無暗に筆を把り、何だか訳も分らない書いたものを他人に示して得々然としてゐた」といっている(『常識閑門』のなかの「思い出」)。このような中学時代の思いは、アメリカに渡ったこの時期においても強かったことであろう。

一方、『蒸氣船』は、福音会の例会での演説の要旨を中心に掲載したものと推測できるし、演説会の内容を公表するために、有志が発行したものと考えられるとするものがある。先の時事新報にあるように、福音会の幹事である大澤の文章を載せたりしていることをみればあながち

否定はできない。また、当然福音会での演説の内容と重なることはあるであろう。しかし、かれらが福音会での演説の内容を公表することが主な目的だったということには疑問がある。福音会例会での演説は、本来若者が無為に過すことのないよう、互いに切磋琢磨しようとすることが目的である。外部に公表するということを主眼としてのものではない。逆に、演説会の内容を公表するという目的のものであるなら、福音会自身が発行すればよいのであるし、現に明治23(1890)年9月からは福音会月報が発行されている。むしろ、福音会でのものは、福音会内部のものという割切りであったのではないだろうか。

明治22(1889)年2ないし8月の福音会例会での発行者4人の演説の題名は、次のようなものである。桑港の日本人(4/27)世の終(6/15 以上松野菊太郎)、救困策(4/05)日本人の此儘長く此地に在るべからざる事(8/3)政教と社会(8/10 以上岡部健太郎)、社会に立つべき覺悟(5/18)自今教会及福音会の上に起れる困難の処置法

(6/29 以上米山梅吉)、吾等は如何なる婦人を娶る可きや(7/13 大沢榮三)というものであつて、例外があるとしても、多分に福音会あるいは宗教上のものといってよいし、外部に公表するということを主眼としたものではないといつてよい。

発行者の1人松野の述懐に「太平洋を隔てて遙か故国の政界を肅清すると云う」という言葉があることや、発禁となった第13号についての報道記事に「激烈なる筆法にて條約改正に關する記事多かりし」とあることをとらえて、本国の政治状況を強く意識した政治性の強いものであったという文章がある。否定はできないが、そのことを余り強く強調しすぎるのではないかだろうか。

当時の国内政治の重大関心事は、自由民権運動と条約改正問題であった。条約改正問題についていえば、体制派のなかでも政争にからんで、そのような不平等な内容のものは駄目だという反対論が強く、いわば国論が二分される状況であった。国内政治に关心があれば、当然若い者として、激論を展開する。

しかし、全部がそのような政治性の強いもの

とはいきれない雰囲気がある。唯一、掲載記事の内容がわかるものに、大沢がサンフランシスコ領事に提出した移民についての上申書がある。明治22年7月1日付の時事新報が報ずる6月10日号である。その要旨は、「ただ漠然と渡航してくる日本人が多い。面倒をみられるものを見ているが、なんとかして欲しい。このままでは、日米の交誼にかかわり、日本に禍をもたらす」というようなものである。駐在領事は、『恭氣船』のその号だけでなく、発行されたものすべてに目を通している筈である。もし、すべての記事が過激なものであるなら、領事はそのままの形で上申書をそのままの形では本国に報告しない。そして、この大沢は、2年後であるが、帰国の際、その領事河北俊彌と船が一緒でもあったという

米山の記事がどのようなものであったかわからぬが、米山の福音会での演説の題名は、前号に記載したとおりである。どうも日本の政治問題について、題名だけからはそれほど過激であるものとは思えない。

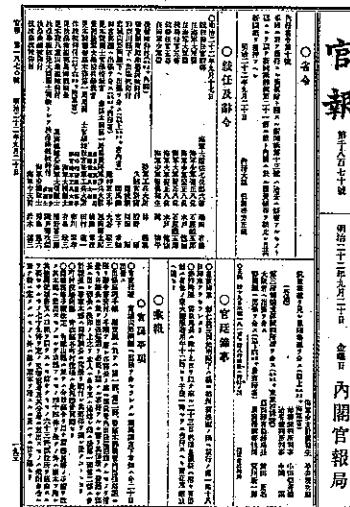
素直に自分達の政治上の意見、それだけではなく多方面にわたる意見を故国に送ることを目的としたものであるといってよいのではなかろいか。

【廃刊の時期といきさつ】 『海外邦字新聞報』誌史は、「其年七月発行の分は内地に於て發賣頒布を禁止され、其儘廃刊した」とし、これにより、7月に廃刊されたとする。しかし、発禁が廃刊の契機とするにはいささか疑問がある。

度々言及するが、『蒸気船』第13号は、明治21年(1889)年9月20日発禁となった。すなわち、同日付官報で「内務省令第十号　米国ニ於テ發行スル蒸氣船ト題スル新聞紙第十三号ハ治安ニ妨害アリタルモノト認ムルヲ以テ新聞紙條例第二十一条ニ依リ内國ニ於ル發賣頒布ヲ禁止シ且其新聞紙ヲ差押フヘシ　明治二十二年九月二十日」

内務大臣伯爵松方正義」とある。そして、このことが9月21日付の『繪入自由新聞』で報じられ、その翌22日の同紙では、新聞紙の没収と題し、19日入港の客船で持ち込まれた『蒸気船第13号が没収されたこと、「其紙上には激烈なる筆法にて條約改正に關する記事多かりしと云ふと報じられた。ちなみに、新聞紙條例第21条は

「外國ニ於テ發行シタル新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗壞亂スルモノ認ムルトキハ財務大臣ハ其新聞紙ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁ジ其新聞紙ヲ押フルコトヲ得」というものである。



明治22年9月
20日に発禁処分
がでたのは、前日の19日、シティ・オブ・シドニー号の乗客が『蒸気船』第13号を持っていたのを確認し、これを差押えるため、その翌日、発禁処分としたわけである。しかし、サンフランシスコと日本の間には18日前後の時間差がある。日本で、ある特定の号が発禁となったとしても、サンフランシスコでは、週刊にしろ、旬刊にしろ、月2回のものにしろ、発禁とは関係なく、既に次の号が発行されている。規定のうえでも、第13号が発禁となったからといって、その他の号が発禁、差押えられるというわけではない。だから、サンフランシスコでその後も発行を継続できる。ましてや、日本の法律の効力が及ばない海外である。

また、『蒸気船』第13号がいつ発行されたものか定かでないが、その発禁処分は、明治22年9月20日である。後に発禁となることを予測して、廃刊としたというのはおかしいし、7月発行のものが発禁処分をうけたとの理由で、廃刊が7月であるというのはなおさらである。

このように、発禁処分となって、そのまま廃刊となつたとすることは、納得し得ない。廃刊となつた理由は、別に考えなければならない。

その理由について、「『蒸氣船』新聞と萌芽期の桑港日本町」は、大沢がサンフランシスコを去り、東部の大学に修学にいってしまうなど、発行に携った者がそれぞれの道を歩むようになったからだとする。廃刊を7月とするなら、この方が説得力がある。

発禁を理由としないが、廃刊が7月であるこ

とについて、どのように考えたらよいであろうか。『海外邦字新聞雑誌史』は、「明治二十六年十二月十五日発行『遠征』第三十二号誌上に『在米日本人の新聞雑誌』と題する左の如き表がでてい」て、そのなかに「(五) 蒸汽船……同二十二年二月ヨリ七月迄」とあるという。『遠征』は、明治24(1891)年7月、サンフランシスコで発行されるようになった雑誌で、主に在米の日本人を対象とした。これが7月というのは、相当確度が高いといわなければならない。

その理由として、大沢がサンフランシスコを去り、東部の大学に修学にいってしまったということの他に、次のようなことが考えられる。

明治22年7月末ころから、サンフランシスコの福音会では、いわゆるリバイバル騒ぎで大騒動であった。多くの若い青年が目の色を変えて、聖霊をうけたとか、自分は生けるキリストを見たとか、感情を高ぶらせて、奇異な行動を取り、誰彼をつかまえでは、自分の考えを押しつけようとした。これを心配したハリスは、若者に東部に神学を勉強に行けと勧めたが、狂信者は応じなかつた。そんな熱狂的な信者に『蒸気船』発行者の岡部健太郎、松野菊太郎がいた。

大沢がいつ東部へ行くことを思い立ったかわからぬが、後の経歷にも見られるように信仰とはやや距離のある大沢は、リバイバルの狂信に嫌気がさして、東部へ行くことにしたのかも知れない。

また、米山がリバイバルに対し、どのようなスタンスであったかわからないが、福音会にある者として、当然リバイバルの影響をうけたとは考えられる。しかし、米山は、それほど狂信的でなかったのではないだろうか。ましてや、米山は、そのとき福音会の書記で、このような騒動を納めなければならない立場でもあった。ちなみに、佐々木邦は、『傳』のなかの「創意と奉仕の一生」で「福音会在宿の当時リバイバルがあって、米山さんはその折りハリス監督から洗礼を受けたものと察しられ」とする。

いずれにしても、リバイバルの異常な雰囲気で、大沢が去り、岡部や松野は、信仰に狂奔し、政治談義どころでなく、『蒸氣船』など見向きもしなくなった。そうなると、米山1人では、とても發行を続けることはできなくなった。『蒸氣

『船』廃刊の理由は、このようなことではないだろうか。

【おわりに】 『蒸気船』について触れる多くの著書や論文がある。そのなかから次の文章を引用して終りとしたい。

新聞紙条例により発禁処分をうけるような内容の新聞を発行した彼らは「亡命自由民権活動家のように、自分の置かれた状況と日本政府の関係を決定的な形で対立させる場面をつくるこ

とはなかつたかもしれない。しかし活動家といえど、渡米時に得た見聞をその後の自分の人生の中に生かす道をとつた者ばかりではない。」時代との格闘にも様々な道がある。長い人生の軌跡で見れば、安孫子〔美山の後の福音会の実質的指導者で、そのままサンフランシスコにとどまり新聞の発行などの事業に携わった〕をはじめとする桑港福音会会員、例えば「蒸気船」に乗り合わせた四人の書生達なども、民権活動家のある種の部分より誠実に生き、時代と正面から格闘したと言えるのではないだろうか。」

- 1) 鷺津尺麿『在米日本人史觀』
(1930.04.01 羅府新報社)
 - 2) 蜂原八郎『海外邦字新聞雜誌史』
(昭和11.01.13 學而書院)
 - 3) 在米日本人會事蹟保存部編纂『在米日本人史』
(在米日本人會 昭15.12.20)
 - 4) 今泉源吉『先驅九十年 美山貫一と其時代』
(昭17.12.18 みくに社)
 - 5) 新井勝絃・田村紀雄「自由民權期における桑港
灣岸地区の活動」
『人文自然科学論集』No.65 1983.12.05)
 - 6) 相川之英「謎につつまれた明治邦字紙の原形」
『汎』創刊号 1986.06)
 - 7) 新井勝絃「自由民權期の渡米邦人活動史(序)」
(田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』)
(1986.09.20 勲草書房)
 - 8) 藤野雅巳「北米に於ける初期日系新聞をめぐる
諸問題」
『上智史學』No.32 1987.11)
 - 9) 田村紀雄・大沢隆『蒸氣船』新聞と萌芽期の桑
港日本町」
『人文自然科学論集』No.97 1994.07.20)

米山梅吉記念館春季例祭

お知らせ

日 時 平成24年4月28日（土）午後2時～
場 所 米山梅吉記念館
内 容 例祭
講 演 [講師] 島田敏男 氏 (NHK解説主幹)
[演題] 「日本政治の行方」
アトラクション
懇親会
多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。



米山梅吉記念館のご案内

●開館時間●

午前10時～午後4時

●休館日●

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
(5月・8月の特定日)



米山記念館及び館報へのご意見、ご感想、寄稿等お寄せ下さい。

米山梅吉記念館 館報

Vol. 19

発行日 平成24年3月15日
発行者 公益財団法人米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
印 刷 フタバ印刷株式会社